



スクリーンは、世界に開かれた窓なのです

「シネ・ヌーヴォ」、「シネ・ピピア」支配人

地下鉄中央線「九条」駅から大阪ドーム方向へ徒歩3分のところに、映画館「シネ・ヌーヴォ」がある。座席数76の、いわゆるミニシアターで、最近急増している大資本系のシネコン（シネマコンプレックス）とは一線を画すアート系の映画館である。普通の映画館では上映が困難な芸術映画や実験映画を主として上映する小規模劇場。シネ・ヌーヴォは、そうしたアート系映画館のひとつなのだ。

上映作品で、劇場の経営方針が分かる。例えば2月には、地球環境破壊の様々な問題を考えるドキュメンタリー「センス・オブ・ワンダー～レイチェル・カーソンの贈り物～」（小泉修吉監督）の劇場初上映や、伝説の革命家ゲバラの素顔に迫るアルゼンチンのドキュメンタリー「チェ・ゲバラ～人々のために

～」などを上映。

3月8日からは、重症心身障害者の通所施設である「訪問の家・朋（とも）」の17年間の取り組みと、母と子の絆を3年半にわたって記録した西山正啓監督「朋の時間～母たちの季節～」や、同じオリエント急行に乗り合わせたビジネスマンと妻、彼の2人の愛人の4人が繰り広げるフランスの恋愛コメディ「バルニーのちょっとした心配事」（いずれも3月21日まで）などを公開中だ。

このアート映画館シネ・ヌーヴォの支配人が、景山理さんである。

景山さんは、映画への思いを、ドキュメンタリー「朋の時間～母たちの季節～」を例に語ってくれた。

「この映画をみると、施設の方々やお母さんの頑張りには頭が下がるし、感動するし、勇気

づけられます。こうした映画を通じて、社会は1枚岩でなく、いろんな人達によって作られているということを知って頂きたいのです。」

映画というメディアは、映像



シネ・ヌーヴォ

を通じて様々な人達を描くことができるし、それを観客に伝えることができる。スクリーンを通じて世界を見ることも可能だ。「個人が世界中を回るわけでもなく、人生のなかで見聞きできるものは限られますよね。だから私はいつも『スクリーンは世界に開かれた窓だ』と言っているんです。」

さらに、「映画によっていろいろ知ったり、感じたり考えたりもできる。たとえば、他者に対する尊厳であるとか、他人に対する痛みですね。映画を見ることによって、そういった感情、感覚とかをもう一度培ってほしいのです」と熱っぽく語る。

日本唯一の 字幕朗読上映も

シネ・ヌーヴォは、目の不自由な人たちのために「字幕朗読上映」をオープン以来続けている日本唯一の常設映画館でもある。76席のうち20席に副音声が入るヘッドフォンを設置。別室に陣取った数名のスタッフが、映像に合わせながら声優を演じ、画面の状況説明を行う。

スタッフ全員が「交通費自腹、手弁当」という映画ファンのボランティアだ。1回の映画を朗読上映するために、自宅で10回前後は映画を鑑賞し、最低2回はシネ・ヌーヴォで練習して本番に臨む。このため、上映は現在月1ペース。3月は、前述したフランス映画「バルニーのちょっとした心配事」(16日16時50分の部)での朗読上映が予定されている。

シネ・ヌーヴォのコンセプトは『多様性』だ。多様性を実現するための一環として、字幕朗読上映がある。「スクリーンを通じて多様な文化を知っていただくことが重要だと思うし、それを実現する場としての映画館なのだから、健常者だけでなく多様な方々に来ていただきたい。目の不自由な方を集めての映画会もいいのですが、健常者と目の不自由な方が同じ場で同じ時間を過ごすことこそ必要なのです。」

自主上映、新聞発行 支配人と映画漬け

学生時代から自主上映運動に関わっていた景山さんは、写植印刷会社を設立した直後の84年から月刊「映画新聞」の発行を始めている。「我々が自主上映するのは、マイナーな作品。まず知ってもらわないと見に来てもらえない」と、新聞発行に踏み切ったのだ。同紙は、休刊する99年11月まで15年間有料で発行。この間、日本映画ペンクラブ奨励賞に輝き、大阪府の文化助成を受けるなど高い評価を受けている。

それはともかく、自主上映や新聞で非商業的な作品の紹介を続けていた景山さんだが、映画界はやがてマイナーなアート系作品を上映するミニシアターが続々と登場し、商業的な大作を上映する映画館と2極分化の時代に突入する。こうした状況のなか、「ミニシアターは東京に集中していて大阪には少ない。大阪にこそミニシアターを」と発奮した景山さんの次の手が、映画館を大阪に建てることだった。

「といってもお金が無かったので、一般市民に出資を呼びかけたのです」。自主上映運動や映画新聞発行による信用と知名度が幸いしたのだろう。1口10万円の呼びかけに、約200人が賛同し3600万円が集まった。こうして97年に誕生したのが、市民出資の映画館シネ・ヌーヴォである。

ちなみに景山さんは、宝塚市が震災復興事業の一環として阪急売布神社駅前に

建設した「シネ・ピピア」の支配人も兼務している。99年オープンの日本初の公設民営映画館で、スクリーンが2つ。1つは東宝の系列館として、もう1つはアート系も上映するミニシアターとして人気を集めている。

支配人としての職以外にも、映画を通じて大阪の地域文化振興に向け活発な活動が続く。02年まで6年間続いた「大阪映像フェスティバル」では、原一男監督のシネマ塾のサポートに奔走し人材育成事業と鑑賞事業に尽力した。卒業生の作品は、「CINEMA塾傑作選」として、6月にシネ・ヌーヴォで上映される。

「映画が趣味で、仕事なんです(笑)」という景山さんの夢は「大阪にアートセンターをつくる」ことだ。「映画館や芝居小屋もあって、いろんな文化スポットも入っている文化拠点を大阪に誕生させたいんです」。長引く不況の中、スポンサー探しも生易しいことではない。だが景山さんが語ると、実現性が高まる。そんな感じを抱かせる映画人ではある。

(文・脇本勤/表紙写真・高島悠介/本文写真・景山理さん提供)



OSAKA「CINEMA塾」打ち上げで。



景山 理(さとし)さん

1955年、鳥根県生まれ。74年、龍谷大学入学と同時に自主上映グループを主宰し、76年、全国自主上映組織体「シネマテーク・ジャポネーズ」発足に大阪代表として参加。78年大学卒業後、写植印刷会社に入社。印刷技術を習得した83年、写植印刷会社を設立して独立した。この間も自主上映活動を続けており、84年には映画専門紙「映画新聞」を創刊し、映画紹介のチャンネルを活字にも広げる。市民出資の映画館「シネ・ヌーヴォ」を大阪・九条にオープンしたのが97年。99年には宝塚市が建設した映画館「シネ・ピピア」支配人に就任。ほかに大阪市の「大阪映像フェスティバル」委員や、各種映画祭などを通じて幅広い映画活動を続けている。